様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月　２９日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2005～2008
課題番号：１７５２０２６５
研究課題名（和文）　コリマ・ユカギール語辞書作成の基礎的研究

研究課題名（英文）　A Basic Study of Compiling Kolyma Yukaghir Dictionary

研究代表者
遠藤　史（ENDO　FUBITO）
和歌山大学・経済学部・教授
研究者番号：20203672

研究成果の概要：東シベリアに分布する古アジア諸語の１つ、コリマ・ユカギール語の本格的な中型辞典の出版を視野に入れ、そのために不可欠である基礎資料の整備および資料分析の枠組みの作成を行った。基礎資料の整備として、現地調査で収集した資料を含む数点の言語資料を電子コーパス化し、一方、資料分析の枠組みの作成としては、日本では最初のものとなるコリマ・ユカギール語の文法書を出版した。研究結果は、消滅の危機に瀕しているこの言語の復興に貢献することが期待される。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	1,000,000	0	1,000,000
２００６年度	800,000	0	800,000
２００７年度	500,000	150,000	650,000
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総　計	3,100,000	390,000	3,490,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学
キーワード：ユカギール語、辞書作成、言語コーパス

１．研究開始当初の背景

コリマ・ユカギール語の本格的な辞書は、1957 年に文献資料のみに頼った学術目的のものがスウェーデンで出版された以外に存在しなかった。この辞書もデータ自体が古い時期（帝政ロシア時代末期）に民族学者等によって収集されたものであり、またそのデータの分析も、コリマ・ユカギール語の文法構造の研究が十分になされていなかった当時の水準を反映して必ずしも十全でない点が散見されるなど、この言語の研究がより進展した今日の水準から見れば、満足すべきものとは言えなかった。現地調査の進展や文献の出版によってコリマ・ユカギール語の新しいデータが近年蓄積され、また現に蓄積されつつある状況を考えるなら、この言語の現在の姿を映す本格的な辞書を出版することには独創的な学術的価値があると考えられた。また学術的な観点から見ると、研究代表者自身が行った現地調査を含めて、特に今世紀に入ってから進展したコリマ・ユカギール語の文法研究の成果を、辞書作成に反映させることにも価値があると考えられた。

また本研究では、その辞書の早期出版に向

けた基礎的研究として、話者数の減少と高齢化が進み危機的状況に瀕していながらなお小さな学習者用辞書しか利用できない現地言語コミュニティーに最新の研究成果を還元するための確実な足がかりを築こうと考えた。

研究代表者は本研究計画以前にコリマ・ユカギール語の現地調査を何度かにわたって行っており、そこから得られたデータによってこの言語の全体像を把握する準備は整いつつあった。本研究計画においては、過去において研究代表者自身が蓄積した研究成果もまた活用しつつ、新たなデータを加えてこれらを整理・統合することによって、コリマ・ユカギール語の研究を新たな段階に進めようと考えた。

２．研究の目的

本研究は、北アジアにアルタイ諸語・ウラル語族といった大語族が進出する以前から分布していたと考えられる古アジア諸語の中で、東シベリアに分布するユカギール語のひとつであるコリマ・ユカギール語に焦点をしぼり、次の４点について研究を進展させることを目的とする：

(1) この言語の資料（現地調査によって得たものと既存の文献資料）の語彙・文法・テキスト面での言語コーパス（電子化された言語資料体）の作成を推進する。

(2) それに基づいてコリマ・ユカギール語の本格的な辞書を作成するための基礎的資料を分析する。

(3) 現地および海外での資料を視野に入れて良質な辞書を作るための基礎的方法を研究し、なるべく早期に辞書を出版するための基礎を固める。

(4) 以上の研究成果を現地還元する方策について考察を深める。

３．研究の方法

(1) コリマ・ユカギール語について、コンピュータへの入力による言語資料のコーパス化を継続的に進め、従来のものより発展させた電子化された言語コーパスを構築し、研究の基盤を築く。この作業については、過去の現地調査で研究代表者自身が収集してきた言語資料、および、存在がすでに確認されている既存の文法・語彙・テキスト資料を対象とする。後者に関しては、辞書作成のためのデータとして特に貢献が大きいと考えられるテキスト資料を重点的に対象とする。また、新しい資料の収集・発見に努め、時間の制約の許す限りそれらをコーパス化する。

(2) 上記の資料の分析を進める。その際には、研究代表者がすでに行ってきた分析も批判的に再検討しながら、辞書作成のためのデータを抽出する際に不可欠となるコリマ・ユカギール語の文法構造の全体像を記述言語学的に、可能であれば類型論的にも把握することを目指し、将来にわたってコリマ・ユカギール語のデータの分析が継続的に行えるような枠組みを構築する。

(3) 上記の分析と平行して、将来の本格的なコリマ・ユカギール語の辞書作成に向けた基礎的方法論の検討を行う。既存の優秀な二ヶ国語辞書を参照しつつそれらの特質を検討し、その視点から従来のコリマ・ユカギール語の辞書・語彙集の検討に進む。コリマ・ユカギール語の基本的な言語構造・言語類型を考慮しつつ、今後に向けて改良すべき点、辞書に盛り込む必要な情報等を検討する。

４．研究成果

(1) コリマ・ユカギール語について、コンピュータへの入力による言語資料のコーパス化を継続的に進めた。その結果、概略次のような資料のコーパス化をほぼ完了させた：

①研究代表者がそれまでの数回の現地調査において収集に努めてきたコリマ・ユカギール語の音韻・文法に関する資料。基本的には、調査者の質問に対して母語話者から体系的に引き出されたデータであり、基礎語彙、それらを含んだ短文、基礎的な文法構造（形態論・統語論）に関する体系的な例文、複文構造に関する例文から成る。

②上記の調査において収集した、コリマ・ユカギール語で語られた民話テキスト資料と母語話者同士の短い会話の資料。これらは母語話者によって自発的に語られたものである点で①と性格が異なる。

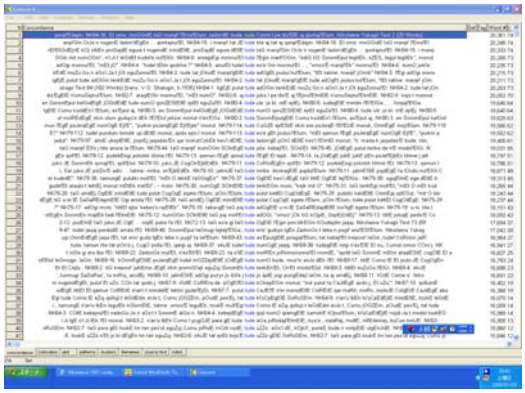
③既存の文献資料のうち、民話約 70 篇からなるテキスト集（話者は複数名）、および、母語話者による自発的な語りと長い民話数編からなるテキスト集（話者は１名）。および、母語話者が自ら書き下ろしたテキスト集 2 点（話者は複数名）、現地の学校で使用されているコリマ・ユカギール語教科書 1 点。コーパスのごく一部を以下に示す。

これらのコーパスは、将来の様々な利用可能性を考慮して、特殊なタグ等を含まないテキストファイルの形で作成した。また一貫した変換方式に基づき、特殊なフォントは使用せず、基本的な ASCII 文字コードの中の文字だけを使用して入力されている。

(2)上記の資料の分析を進め、辞書作成のためのデータを抽出するために、また、将来にわたってコリマ・ユカギール語のデータの分析が継続的・安定的に可能となるような枠組みを構築するために、コリマ・ユカギール語の文法構造および類型論的特徴を把握することを目的とする著書『コリマ・ユカギール語の輪郭―フィールドから見る構造と類型―』を出版した。本書は全6章からなり、前半の3章ではコリマ・ユカギール語の基本的な構造を扱う（第1章で音韻論、第2章で形態論、第3章で統語論)。また第3章の後半では若干のテキスト資料を提示している。一方、後半の3章では、コリマ・ユカギール語の言語類型上興味深い現象を選んで、現地で収集した言語資料に基づいてより深いレベルでの考察を加えている（第4章では接頭辞の有無の問題を、第5章では複文の統語構造の問題を、第6章では指示転換をめぐる諸問題を扱っている)。この著書をまとめることにより、上記(1)でコーパス化した資料を一貫した枠組みのもとで継続的に分析することが可能となった。

(3) 研究期間が終了するまでに研究代表者が収集することに成功した数点のコリマ・ユカギール語の語彙集・辞書の特徴を分析・検討し、将来の本格的なコリマ・ユカギール語の辞書作成に向けた基礎的方法論の検討を行った。その結果、現在消滅の危機に瀕していると危惧されるコリマ・ユカギール語の辞書としては、当座の学校教育の必要性を満たすための既存の学習者用辞書を補完・拡充するような形での中型辞書が必要であるとの結論に達し、そのためのデータ分析・資料蓄積の必要性を認識した。また、既存の優秀な二ヶ国語辞書の検討からは、従来のコリマ・ユカギール語の辞書・語彙集に欠けている最大の特徴は豊富な例文であり、将来出版されるべき中型辞典は、可能な限り一次資料からの引用を含む例文を提供するべきであるという必要性を認識した。

上記(1)によって構築されたコーパスは、様々な検索等を行ってデータを再整理することにより、上記の必要性を確実に満たすことができる。中でも有用なのは、特定の語彙ないし語句を中心として様々な文脈を同時に表示できる検索方法である KWIC 検索である。コーパスを KWIC 検索した一例を次に示す。



(4)上記(1)で構築した言語コーパスを用い、上記(3)で必要性を認識した将来の中型の辞書を作成するための基礎資料として、上記資料のうち1点（総語数 23,346 語、異なり語数 5,600 語）について、出現順・頻度・借用関係の情報を付したアルファベット順単語リストおよび頻度順単語リストを作成した。前者は上記(2)による分析の概要、上記(3)に関する考察とともに、冊子体で出版した研究成果報告書『コリマ・ユカギール語辞書作成の基礎的研究』に収めて、また後者は単独の論文として発表した。

(5)本研究によって得られた成果が国内外でもたらすインパクトについては次のようにまとめることができる：

①本研究が構築したコーパスという基礎的なツールの整備により、現時点までに蓄積されたコリマ・ユカギール語の資料をかなりの程度まで整理し、コンピュータ上で処理することが可能となった。これにより多数の文例・用例が要求されるコリマ・ユカギール語の中型辞典を作成・出版するための円滑な道筋をつけることができた。そのような辞典を将来出版することにより、現在消滅の危機に瀕しているとされるコリマ・ユカギール語の復興に向けて、直接現地に貢献できる可能性が開かれる。

②コリマ・ユカギール語の文法構造および類型論的特徴を把握することを目的とする著書『コリマ・ユカギール語の輪郭―フィールドから見る構造と類型―』を出版することができた。この本は、日本語で書かれたものとしては初めての（そして世界的に見てもごく僅かな）コリマ・ユカギール語の文法書であり、まだ多くの改善の余地が残されているとは言え、今後のユカギール語、古アジア諸語、北方諸言語の研究等に貢献することができた。また、この本により、将来にわたってコリマ・ユカギール語のデータの分析が継続的・安定的に可能となるような枠組みを構築することができた。

③本研究が構築したコーパスは、辞書のために役立つだけではなく、文法や談話機能の

研究など、言語構造・言語機能の研究にも同様に役立てることができる。これらのデータを用いることで、今後、上記の文法書の改良を含めて、さらに大規模で詳細なコリマ・ユカギール語の文法研究を展開することが可能となった。このことは将来、国内外の言語学研究への貢献を可能にする。また一部試行的に実践を試みたが、原著者の了解を得た上でこれらのコーパスを国際的に共同利用することが可能となれば、将来国際的な共同研究にも貢献することが可能となる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① 遠藤　史、コリマ・ユカギール語テキスト頻度順単語リスト、和歌山大学経済学部 Working Paper Series No.09-03, 1-105, 2009、査読無

② 遠藤　史、ユカギール語、梶茂樹・中島由美・林徹編、事典世界のことば１４１、大修館書店、68-71, 2009、査読無

③ Toshiro Tsumagari, Megumi Kurebito and Fubito Endo, Siberia: Tungusic and Paleosiberian, In: Osahito Miyaoka, Osamu Sakiyama and Michael E. Krauss (eds.), The Vanishing Languages of the Pacific Rim, Oxford University Press, 386-405, 2007, 査読有

④ 遠藤　史、ユカギール語を話す人々、言語、第 35 巻 9 号、100-103、2006、査読無

⑤ 遠藤　史、コリマ・ユカギール語使役文の構造、日本言語学会第 132 回大会予稿集、317-320、2006、査読無

⑥ 遠藤　史、コリマ・ユカギール語民話文体論の試み、経済理論（和歌山大学経済学会）、第 331 号、1-18、2006、査読無

⑦ 遠藤　史、コリマ・ユカギール語における-l-ge節の機能をめぐって、和歌山大学経済学会研究年報、第 9 号、1-27、2005、査読無

〔学会発表〕（計２件）

① 遠藤　史、コリマ・ユカギール語使役文の構造、日本言語学会第 132 回大会、特別展示「少数言語の文法研究から見えてくるもの―その２―」、2006 年 6 月 18 日

② 遠藤　史、分析にチャレンジ！東シベリアのコリマ・ユカギール語の使役文、公開シンポジウム「フィールドワークの光と影」、2006 年 2 月 11 日

〔図書〕（計２件）

① 遠藤　史、コリマ・ユカギール語辞書作成の基礎的研究、和歌山大学経済学部、158pp.、2009

② 遠藤　史、コリマ・ユカギール語の輪郭―フィールドから見る構造と類型―、三恵社、221pp.、2005

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
遠藤　史（ENDO FUBITO）
和歌山大学・経済学部・教授
研究者番号：20203672

(2)研究分担者

(3)連携研究者